

# 青を巡る道

石井町の北辺を画する吉野川は、かつて氾濫により多くの人を苦しめました。しかし、同時に運ばれた沃土は、そこに石井町を彩る青色のひとつ「藍」を育んだのです。戦国期に需要が高まった阿波藍は、徳島藩の藍作奨励を経て藍商たちに莫大な富をもたらします。

田中家は寛永年間（1624～1644）から代々続いた藍商の家。現在のこの「田中家住宅」は安政元年（1854）頃から約30年の歳月を費やし完成させたものです。左手の藍寝床（藍の葉を発酵させて「すくも」と呼ばれる染料に加工する場所）、茅葺屋根の主屋、地元産の青石が用いられている石垣など、藍商の全盛時代を彷彿とさせる規模と造りが印象的です。

武知家も田中家同様に藍商として名を馳せた家。主屋（1862年築）を中心に各棟が周囲をとりまく構成で、青石がふんだんに用いられているのも田中家住宅と同様です。中でもこの住宅で目を引くのが県指定文化財にもなっている藍寝床。木造瓦葺二階建の造りは非常に大きく、現在でもここでは「すくも」が製造されています。



市楽の板碑群（県指定有形文化財）

石井町高川原字市楽363 / 見学自由



桜間の池跡・石碑（県指定史跡）

石井町高川原字桜間281 / 見学自由

石井町の南辺を画する山塊は、もうひとつの青色「阿波の青石」の産地。良質の緑泥片岩である青石は、古くは古墳時代より様々な用途に活用されてきました。

県の有形文化財にも指定されている市楽の板碑群もそのひとつ。石川神社境内にあり、五輪塔型、国東型、双式型などの様々な様式からなる17基の板碑が立っています。年代が判っているもののうち、最古のものは弘安8年（1285）の紀年銘のものです。



田中家住宅（国指定重要文化財）

石井町藍畑字高畑705 / ☎088-674-0707  
見学は日曜日・祝日のみ（他の日程を希望する方は2週間前までにお問い合わせください。）  
見学料 大人 500円（ガイドなし300円）・小人（小学生以下）200円（ガイドなし無料）



武知家の藍寝床（県指定有形民俗文化財）

石井町高川原字天神133（見学は外観のみ）

また、石の文化財で忘れてはならないのが桜間の石碑。夫木和歌集において「鏡とも見るべきものを」と称えられた美しい池がありましたが、江戸時代後期には池跡となっていたようです。それを惜しんだ阿波藩主蜂須賀齊昌の命により、文政11年（1828）より海部郡由岐浦の海中より砂岩の巨石を運び、その景勝を記念する石碑としました。石碑の表に刻まれた由来を語る和歌と裏に刻まれた石碑運搬の顛末に触れ、かつての名勝地に思いを馳せてみませんか。

# つれづれと歩く、石井町歴史散歩

# 古を巡る道

吉野川の下流に位置し、古くは弥生時代から栄えていたといわれる石井町。早くから多くの寺院が建立されていたことから、この地が阿波の政治・文化の中心であったことがうかがい知れます。



童学寺もそんな石井町の歴史を象徴する文化財のひとつ。寺伝によれば飛鳥時代に高僧行基が創建したというこの童学寺、奈良時代末には幼少の空海がこの寺で学び折に「いろは四十八文字」を創作したと伝え、寺号「童学寺」の由来ともなっています。後に空海がこの寺を再訪し、伽藍を整備するとともに自ら彫刻した薬師如来・阿彌陀如来・観音菩薩・持国天・毘沙門天・歡喜天を安置したとの言い伝えも。本堂の裏には桃山時代の作とされる庭園「逍遙園」もあり、季節ごとに見せる様々な表情で訪れる人の目を楽しませてくれます。

童学寺は現地に行けば今も見ることが出来ますが、その一方で今は失われてしまった寺院も。それが奈良時代に聖武天皇の発願により全国に建立された官寺のひとつ、阿波国分尼寺跡です。現在は建てていた場所が国史跡に指定され、往時のすがたを今に伝えるための史跡整備が進められています。整備にともなうこれまでの発掘調査では金堂跡・講堂跡・北門跡などが見つかり、国分尼寺の伽藍配置がわかる稀有な例として、全国的にも重要な遺跡となっています。

そのほか、古代豪族の氏寺跡とされる石井廃寺など、古い歴史を示す寺社や寺跡が町内のそこかしこに。折あらばそれらを訪ね、石井町の「往にし方」へ旅してみるのもまた一興。



童学寺

石井町石井字城ノ内605  
☎088-674-0138  
境内自由 / 庭園拝観料 200円



阿波国分尼寺跡（国指定史跡）

石井町石井字尼寺12-1 他 / 見学自由

